

18:15から20:30まで - 2F 多目的ホール

ユーゴ・カプロン (2019)
HUGO CAPRON
造形芸術



『Homes / 家』、2019年

オリヴィエ・セヴェール (2016)
OLIVIER SÉVÈRE
造形芸術



『Laps / ひと時』、2017年

ひと時とは短時間の時空意味しています。オリヴィエ・セヴェールが撮影したゆっくりと際限なく動き、崩れ落ちていくような石の映像は興味をそそります。人工的なプロセスなのか、自然な地質学的事象なのかを示すものは何もありません。

その反面、この絶え間ない動きは私たちが見ることのできないものを映し出しているのです。それは、何百万年も前に私たちの大陸を形成するものとなったプレートテクトニクスという現象であり、この《ひと時》の尺度は概して人間には知りようもないものです。

昨年、ヴィラ九条山で制作されたキャンバスにアクリル絵具によるこの絵画は、造形作品の仕事においてユーゴ・カプロンがはっきりとした方向転換をするきっかけとなった作品のひとつ。機械的な絵画制作からより自然発生的な営みへの移行に伴い、紙の上でのコラージュから引き出されたインスピレーションがグレーの画面全体により再現された奥行きに反映されています。ほぼ音楽的とも言える色合いの身体的表現が来るべきコンポジションの端緒を告げています。

マニュエラ・ポール＝カヴァリエ
(2014)
MANUELA
PAUL-CAVALLIER
工芸



『Poésie Blanche / 白い詩』
『Poésie blanche, inspiration du jardin japonais / 白い詩、日本庭園からの着想』
2015年

日本の枯山水が降り積もった雪に覆われる時、その佇まいは調和のとれた風景として立ち現れ、そこでは純白に包まれた柔らかな曲線のリズムに合わせて光が舞い踊ります。こうした詩的なビジョンこそが、金箔工芸家のマニュエラ・ポール＝カヴァリエが繊細に伝えようとしているもの。金箔を用いた彼女の仕事は、実体あるものと空無との感動的な出会いを一筋の陽の光のように引き立たせます。

ミリン・グエン (2015)
MYLINH NGUYEN
工芸



『Sceau à champagne / シャンパンクーラー』2015年

銅系金属の旋盤加工と言う珍しい技術を使ってオブジェやアクセサリを制作しているミリン・グエン。2013年には、「手の賢さに捧げるリリアヌ・ペタンクール賞」を受賞。動植物界がインスピレーションの元になっている。

18:15から20:30まで - 2F 多目的ホール

小野規 (2017)
TADASHI ONO
写真



COASTAL MOTIFS, 2017-2018,
綾里湾 - 岩手県
(1933-1960-2011) #1167
COASTAL MOTIFS, 2017-2018,
大船渡湾 - 岩手県 #9183
COASTAL MOTIFS, 2017-2018,
大野湾 - 岩手県 #9290

写真シリーズ『COASTAL MOTIFS』を制作するに当たって、小野規は悲しくも2011年に甚大な被害を受けた東北地方の沿岸風景を2017年に改めて訪れました。400kmに及ぶ海沿いの新たな旅について小野規が報告するのは、途方もないお金をかけて建設中の巨大な防波堤。これが、自然の脅威に対する政府の回答のようです。2020年に予定されている竣工時には、大海原との対話や巨大なコンクリートの壁を前にした海景の描写はどんなものになるのでしょうか。

15:30から20:30まで - 3F STUDIO 1

マルティヌ・レイ (2018)
MARTINE REY
工芸



『URUSHINAGASHI / 漆流し』、2018年

「動作はそれが忘れられた瞬間から良い動作となり、その威力を発揮する」。漆流しについてマルティヌ・レイが引用するこの言葉は、ヴィラ九条山でのレジデンス時にこのアーティストが開発したこの技法を明らかにしています。漆を水の上に垂らすと、架空の地図が出現し、飽くことなく形を変えていきます。心をとりこにする実験において、細やかな動作が水に漂う世界の製作過程を見せてくれます。

15:30から20:30まで - 3F STUDIO 1

ベアトリス・バルクー (2018)
BÉATRICE BALCOU
造形芸術



『Tôzai / 東西』、2018年

『Tôzai / 東西』はベアトリス・バルクーが2013年に着手したパフォーマンス・シリーズ「題名のない儀式」の延長線上に位置する作品。このパフォーマンス・シリーズは他のアーティストの作品を観客の目の前で設置・撤去するというもの。ベアトリス・バルクーは奥村雄樹の2012年の仕事から着想を得ていますが、それは奥村自身が美術家・赤瀬川原平から着想を得たもの。赤瀬川は『宇宙の缶詰』という立体作品を1964年に発表しました。それは蟹缶の中身を食べた後、そのラベを缶の内側に貼り直し、缶をもう一度ハンダ付けして閉じるというもの。内と外を逆転させることで、赤瀬川は宇宙全体を缶詰にしたのです。この新たな儀式はビデオ撮影用に初めて企画されたもので、複数の缶と時空を巻き込み、複数の身体が動きとリズムを合わせた手のダンスを見せてくれます。

15:30から20:30まで - 3F STUDIO 1

アンヌ・クシラダキス (2016)
ANNE XIRADAKIS
デザイン



『Matière, main, ustensile / 素材、手、道具』、2016年

『素材、手、道具』はビデオによる習作で、食材、手の動きと道具についての問い掛けが、デザイナーのアンヌ・クシラダキスによって行われています。この3つの要素が結び合わされることで、菓子が生まれます。京都で撮影された和菓子工房の映像と並行して、アンヌ・クシラダキスが関心を寄せているのがパティシエールの渡辺薫子の仕事。渡辺は和洋菓子を成形し、試食に提供するために、アンヌ・クシラダキスが考案した《盛り付けのための道具》を用いています。それは菓子職人のための道具であるとともに盛り付けの容器であるというハイブリッドなオブジェ。撮り下ろしのリズム感あるビデオの編集は動作の芸術に対するグルメ好みの賛歌となっています。

15:30から20:30まで - 3F STUDIO 1+2

フロール・ファルシネリ (2020)
FLORE FALCINELLI
工芸



『Corps absent / 不在の身体』、2020年
『Calcinée / 焼け焦げ』、2020年
『Sédiment I / 堆積物 I』、2020年

新たな出会い、以前のレジデントが残していったものや気儘な森歩きに伴いフロール・ファルシネリが日本で集めたモノが、デザイナーである彼女がレジデンス中に探求した課題であるモノの摩擦と傷さの概念と響き合います。ここで問題となるのは、作品を流用することを特に道筋を決めることなくその創作過程において予定し、取り入れること。そのため、意識的なアプローチと合わせて、こうした漆塗りのオブジェやそれを構成する素材が摩擦し、自らのリズムを見出せるよう、放ったままにおくことも必要となります。

15:30から20:30まで - 3F STUDIO 2

ジルベール・ヌノ (2007)
森本ゆり (アンサンブル九条山)
& ロジェー・ワルツヒ
GILBERT NOUNO
YURI MORIMOTO (ENSEMBLE
KUJOYAMA) & ROGER WALCH
造形芸術 & 音楽



『よこに [Yokonji]』、2020年

能楽とそこに登場する亡霊、現代史と科学の破壊的な力に着想を得た『よこに [Yokonji]』はジルベール・ヌノが2007年に森本ゆりのために作曲したピアノソロ曲。ピアノの音色により生成される現実と想像の入り混じった対話が、ヒンドゥー教の聖典『バガヴァッド・ギーター』について語る《原爆の父》ロバート・オッペンハイマーと原爆投下の思い出をサウンドアーカイブで語る無名の日本人女性の間で交わされます。

ニューイ・ブランシュKYOTOのために提案される作品はジルベール・ヌノのビデオインスタレーションで、森本ゆりが2020年に改めて演奏した『よこに [Yokonji]』をフィーチャー。映画監督ロジェー・ワルツヒの映像に移し替えられた動く電子版画がほとんど非現実的な流動する世界を生み出します。と言うのも、それは今の世界を指し示しているからにほかなりません。

15:30から20:30まで - 3F 廊下

ヴァンサン・ジョソーム & バティスト・イモネ (2017)
VINCENT JOUSSEAUME & BAPTISTE YMONET
工芸



『Chaîne de pluie / 鎖樋』、2017年

アトリエ・ポリエードル所属の2人のデザイナーの京都でのレジデンス中に制作された『鎖樋』は一続きのモジュールが吊り下げられており、寺院や伝統的な日本家屋の灰色の屋根瓦である《いぶし瓦》と同じ土で作られたもの。還元焼成されたテラコッタがヴィラ九条山の打放しコンクリートのグレーと対峙されました。そして、様々なモジュールの連結と接合によりグラフィカルで動きのある展開が生み出され、空間に描かれた垂直のラインは風にゆっくりと揺られるに任せるとともに、その中で雨水が流れるのです。

15:30から20:30まで - 3F STUDIO 2

グレゴリー・シャトンスキー (2014)
GREGORY CHATONSKY
造形芸術



『Movable picture / 動きうるイメージ』
2016年

ニュージーランドでのレジデンス中に撮影されたこのビデオでは、ある滝の荒々しい動きが極端なスローモーションで映し出され、その渦や不規則な動きが明らかにされます。不変性と猛り狂いの間で、水の流れはついに動きのなかの静止、不動の動きとなり、その微細な粒子が京都で新たに再現されます。

15:30から20:30まで - 2F 中庭 (中央)

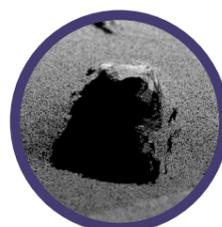
アンジェラ・デタニコ & ラファエル・ライン (2017)
ANGELA DETANICO & RAFAEL LAIN
デザイン



『Vague / 波』、2017年

京都最古の禅寺である建仁寺の詩的なイメージがアンジェラ・デタニコとラファエル・ラインのアーティスト2人組により京都でのレジデンス中に新たに解釈し直されました。《Vague》(波)という単語のグラフィカルな反復に基づき描き出された庭園は私たちの目の前で形を現し、記号の壁画の中で動き始めます。文字がもはや言語となり、イメージはコンセプトとなると同時に現実ともなるのです。

グレゴリー・シャトンスキー (2014)
GREGORY CHATONSKY
造形芸術



『The Missing place / ミッシング・プレイス』、2014年

多くのアーティストの発想源となってきた京都の龍安寺はその細分化されたビジョンと庭に配置された15の石を同時に見渡すことができないことで有名です。ヴィラ九条山でのレジデンス時にグレゴリー・シャトンスキーに与えられた特別許可のおかげで初めて3D映像にデジタル化されたこの由緒ある庭のあらゆる側面を、今ではデジタル技術による移動とその無限の可能性により楽しむことができます。

18:00から20:30まで - ヴィラ九条山

スーザン・バージュ (1992)
SUSAN BUIRGE
ダンス



『玉の緒』, 2020年

命を繋ぐ糸と解釈できる「玉の緒」-この「玉の緒」は、1992年にヴィラ九条山に初めて足を踏み入れたレジデントアーティストであるスーザン・バージュが構成・振付を担当したダンス作品に与えられた名前でもあります。第10回ニュー・ブランシュKYOTOの一環として開催されるヴィラ九条山のプログラムのために作られた本作品は、10名のダンサーと7名の音楽演奏家と共に、屋外の闇の中で同時多発的に上演されます。

詳細は「玉の緒」プログラムをご覧ください。

16:00から18:00まで - STUDIO 2



もしもし KYOTO ? リモートレクチャー

ヴィラ九条山(京都)から、フランス、ベルギーに居る元レジデント作家達に電話がかけられます。電話で直接つながることができる、またとない機会です!

作家自身が、既出版されている作品や、未発表の作品を、フランス語、または日本語で朗読する、特別な時間をお過ごしください。朗読箇所日本語訳も準備しています。

コリーヌ・アトラン (2003)
CORINNE ATLAN
文学

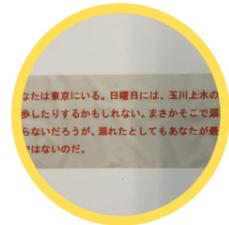


『曙の僧院』、アルバン・ミッシェル出版、2006年
ヒキエ文庫日本、2012年

『曙の僧院』は明治時代におけるある若い僧侶の精神的冒険の物語で、その執筆はヴィラ九条山で行われました。出家したばかりの若い主人公・密道は高野山で厳しい修行をしながらも、仏教が人生の苦とされる煩悩からまだ解放されていない。コリーヌ・アトランの処女作であるこの小説において私たちが誘われるのは、絶対的なものを探求し、仏陀の足跡を辿るため、故郷である京都を離れ、インド、ネパール、そしてチベットへと導かれる若い僧侶のあとを追うこと。修行の旅から戻ると12年の時が過ぎ去り、日本は大きな変化を遂げていました。

動作が水に漂う世界の製作過程を見せてくれます。

フィリップ・アダム (2004)
PHILIPPE ADAM
文学



『玉川上水』、ヴェルティカル出版、2005年

『玉川上水』において、フィリップ・アダムが見つめ直すのは有名な日本人作家、太宰治の最後の日々。太宰は1948年6月13日に東京郊外の玉川上水で入水自殺を図りました。潜在的な罪悪感、慢性的な酩酊状態、愛情の探求と不可能な贖罪がこの独白形式の小説の主軸となっており、この作品からの抜粋をお届けします。ここでは、ポーズと状況の叙述の間を微妙に揺れ動きながら、この奇妙な1日の物語を内側から見直す試みが行われています。

オリヴィア・ローゼンタール (2018)

OLIVIA ROSENTHAL

文学



『私生児礼讃』、ヴェルティカル出版、2019年

世界が身の回りで崩壊しようとする時、オリヴィア・ローゼンタールの新作小説の9人の登場人物は彼らを脅かす危険にどのように立ち向かうのでしょうか? まったく意外なことに、彼らは5夜連続で、私たちの社会であるかも知れない社会において、自らの来歴をその起源まで遡ることになります。リアリズムとSFの狭間で、2020年との気配が呼応を伴いながら、あなたが選び出す抜粋箇所が、数夜のうちのいずれかで、あなた自身を10人目の登場人物に仕立て上げます。

アルノー・リクネール (2019)

ARNAUD RYKNER

文学



『L'île du lac / 湖の島』(執筆中)

アルノー・リクネールがお届けするのはヴィラ九条山でのレジデンスに引き続いて執筆中の小説次回作『湖の島』からの抜粋。小説の舞台は、湖にボツと浮かび、山々に囲まれた辺鄙な島にある一軒家。この家にはひとりの男が住み、単調な活動を繰り返し、逃れようのないさざ波の音を拍子として、頑なに沈黙を守っています。時には霧が何もかも包み込み、湖を見えなくすることも、時には予期せぬ音が静寂を横切ること...。その音が聞こえますか?

ジャン＝フィリップ・トゥーサン (1996)

JEAN-PHILIPPE TOUSSAINT

文学



『切迫と忍耐』、深夜叢書出版、2012年
『逃げる』深夜叢書出版、2005年

「動作はそれが忘れられた瞬間から良い動作となり、その威力を発揮する。漆流しについてマルティーン・レイが引用するこの言葉は、ヴィラ九条山でのレジデンス時にこのアーティストが開発したこの技法を明らかにしています。漆を水の上に垂らすと、架空の地図が出現し、飽くことなく形を変えていきます。心をとりにする実験において、細やかな動作が水に漂う世界の製作過程を見せてくれます。

17:00から18:00まで - 2F 多目的ホール + ZOOM

エリック・ミン・クオン・カスタン (2020)

ERIC MINH CUONG CASTAING

ダンス



Sous influence #imissyou (ヴィラ九条山におけるニュー・ブランシュKYOTOバージョン)、2020年

夕方から朝まで、振付家のエリック・ミン・クオン・カスタンがニュー・ブランシュKYOTOを覚醒状態に保つため、「sous influence / 酔いしれて」というタイトルで《クラブ・ヴィラ九条山》をオープン。京都の高みからのネットによる生中継で、そこでは物理的な境界は消失することになります。2020年度のダンス部門のレジデントと共有するこの集団的トランス状態において、皆さんがヴィラ九条山や自宅に居ながらにして招かれるのは、日本最大のネットによるナイトクラブ。目を閉じて、テクノや京都の女性ダンサーを伴った振付家エリック・ミン・クオン・カスタンに導かれるままにしてください。意識が変化し、解き放たれるままにしてください。夜も昼もまだ始まったばかり!

参加方法は2種類:

ヴィラ九条山の講堂で - 最大参加者数の設定あり(感染対策のため) 登録は次のメールアドレスへ: satsuki.konoike@institutfrancais.jp 登録者の名前、メールアドレス、電話番号、住所を記載してください。(保険については参加者負担) 遅くとも17時のイベント開始の10分前には会場に到着いただきますようお願いいたします。

好きな場所からオンラインでイベント当日にこのフェイスブックページに記載されるZoomのリンクから参加。Zoomでの参加にあたって: よりよい環境で参加いただくために、パソコンからの接続を推奨します。また、お使いの機器(パソコン、タブレット、スマートフォンなど)に、事前にZoomのアプリケーションをダウンロードしていただくことが必要になりますのでご了承ください。

当日はエリックエリック・ミン・クオン・カスタン本人が画面上で参加者をお迎えします!

ヴィラ九条山は、フランス外務・国際開発省管轄の文化機関です。

アンスティチュ・フランセ日本の支部の一つとして活動し、主要メセナのベタンクールシュエラー財団とアンスティチュ・フランセの支援を受けています。

www.villakujoyama.jp



ヴィラ VILLA ■ ■ ■
KUJOYAMA ●
九条山

INSTITUT
FRANCAIS
フランス語の学校
Paris

Fondation
Bettencourt
Schueller
Reconnue d'utilité publique depuis 1987

「EN MOUVEMENT」
ニュー・ブランシュ
NUIT BLANCHE KYOTO
2020年10月3日(土)
15:30から20:30まで
入場無料
VILLA KUJOYAMA
ヴィラ九条山

ヴィラ九条山設立以来の様々なプロジェクトとアーティストが25近く一同に集まります。

参加レジデント:

- スーザン・バージュ (1992)
- ジャン＝フィリップ・トゥーサン (1996)
- コリーヌ・アトラン (2003)
- フィリップ・アダム (2004)
- ジルベール・ヌノ (2007)
- アルメル・バロー (2010)
- グレゴリー・シャトンスキー (2014)
- マニュエラ・ポール＝カヴァリエ (2014)
- ミリン・グエン (2015)
- オリヴィエ・セヴェール (2016)
- アンヌ・クシラダキス (2016)
- ヴァンサン・ジョソーム&バティスト・イモネ (2017)
- 小野規 (2017)
- アンジェラ・デタニコ&ラファエル・ライン (2017)
- オリヴィア・ローゼンタール (2018)
- マルティーン・レイ (2018)
- ベアトリス・バルクー (2018)
- アルノー・リクネール (2019)
- ユーゴ・カプロン (2019)
- フール・ファルシネリ (2020)
- エリック・ミン・クオン・カスタン (2020)

協力:

清課堂(アルメル・バロー、ミリン・グエン、マニュエラ・ポール＝カヴァリエの作品)

森本ゆり(アンサンブル九条山)(ジルベール・ヌノの作品)

感染状況や社会情勢により、イベントに変更がある場合がございます。予めご了承くださいませ。

Villa Kujoyama - ☎ - 075-761-7940
〒607-8492 京都市山科区日ノ岡夷谷町17-22
最寄駅の蹴上から徒歩10分